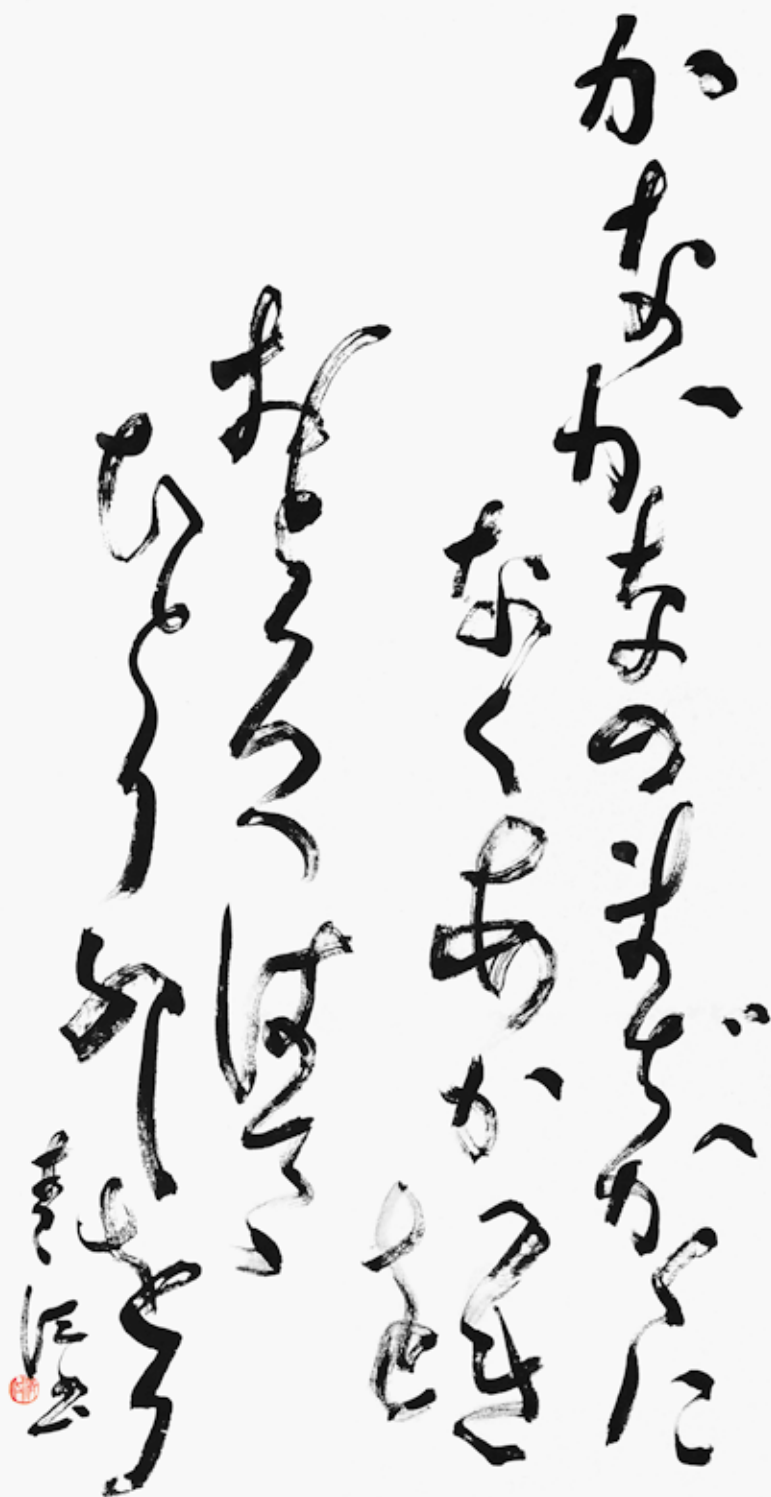


企画展

筆墨を友として

書家・横島青江遺作展



かなかなの まぢかくになくあかつきを
おとろへはててひとりふしをり(斎藤茂吉歌)

平成28年

7月9日(土) ▶ 8月31日(水)

【開館時間】 平日 10:00~18:30 土・日・祝 10:00~17:00

夏休み期間=10:00~18:30 (土・日・祝日も含む)

【休館日】 月曜日(祝日の場合はその翌日)、祝日の翌日 ※祝日は開館しています

入場無料

坂東郷土館ミュージズ



坂東市立資料館 〒306-0502 茨城県坂東市山2726
TEL 0280-88-8700・0297-44-0055
<http://www.city.bando.lg.jp/page/dir000060.html>

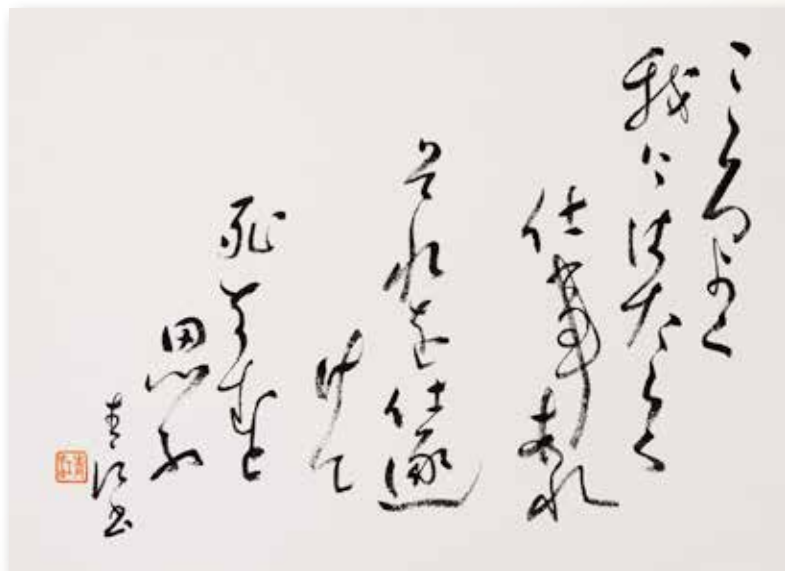


横島昇氏(号・青江)は、昭和10年(1935)に猿島郡中川村(現・坂東市長谷)に生まれました。市役所勤務の傍ら書に親しみ、書道家の平勢雨邨氏に師事。昭和41年(1966)書道同文会展にて特選(読売新聞社賞)を受賞し、昭和44年(1969)には会員に推薦されました。その後、「多様な用筆を一的に研究し、日本書道の新路を開拓しよう」と昭和47年(1972)に田邊古邨氏が創設した書道一元會に同人として参加。昭和52年(1977)には平勢雨邨氏が中心となって結成した茨城書道一元會の創設にも参画以来、會の中心メンバーとして活躍する一方、書道誌「活法」の課題手本揮毫や公民館書道教室講師を務めるなど、書道の普及・発展と後進の指導に尽力されました。晩年は、書道一元會の目指す国文と漢文の双方にわたる書作の研究、漢字仮名交じり書と言われる書作の本質探究に力を注ぎ、書に対して真摯に向き合いつつ自己の研鑽に努められました。昨年10月24日に80歳で亡くなりましたが、横島氏の書に取り組む姿勢には非常に厳しいものがありました。それは、深遠な書の世界を少しでも味わわせたいとの氏の一念がそうさせたものといえるでしょう。

このたび、ご遺族の全面的なご協力を得て、横島昇氏の書作品や関連資料を展示紹介する「横島青江遺作展」を企画いたしました。一人でも多くの方々に先生の書作品にふれていただき、故人のお人柄を偲んでいただければ幸いに存じます。

略 歴

- | | |
|-------------|-----------------------------------|
| 昭和10年(1935) | 坂東市長谷に生まれる。
平勢雨邨先生に師事する。 |
| 昭和41年(1966) | 書道同文会展にて特選(読売新聞社賞)を受賞、準会員。 |
| 昭和44年(1969) | 書道同文会展にて会員に推薦、審査員。 |
| 昭和47年(1972) | 書道一元會の創設に同人として参画。
審査員・理事を歴任。 |
| 昭和52年(1977) | 茨城書道一元會の創設に同人として参画。理事・理事長・副会長を歴任。 |
| 書道活法會参与・審査員 | |
| 青友会主催 | |



こころよく
我にはたらく
仕事あれ
それを仕遂げて
死なむと思ふ
(石川啄木歌)



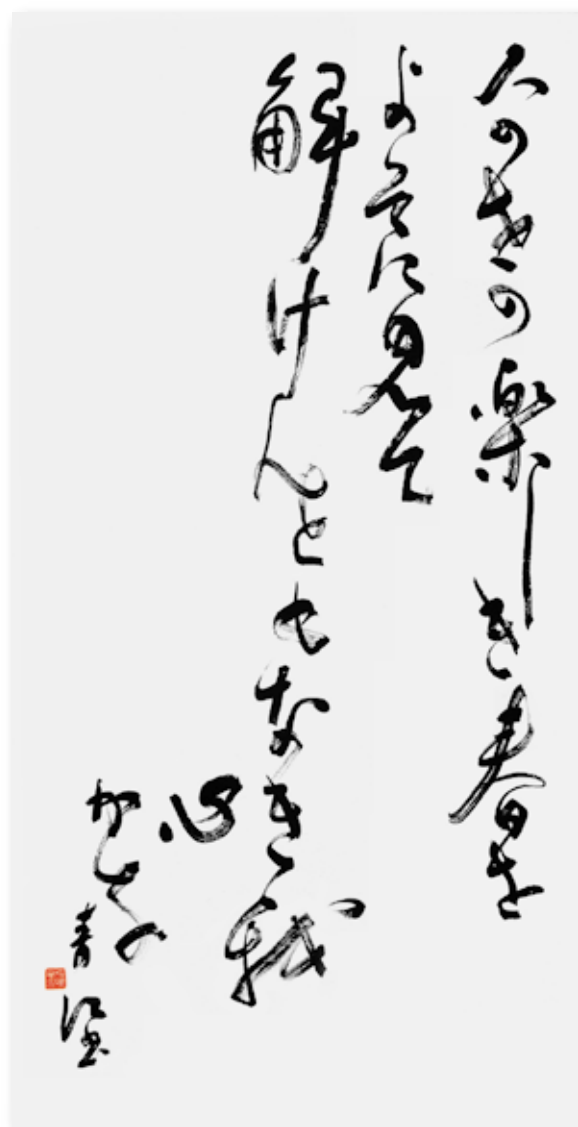
教学相長

筆をとって 其の美を追った者は、
例外なく 其の美のとりこになる。

『現代書道の可能性』より



楽在其中



人の世の 楽しき春を よそに見て
解けんともなき 我心かな (西田幾多郎歌)



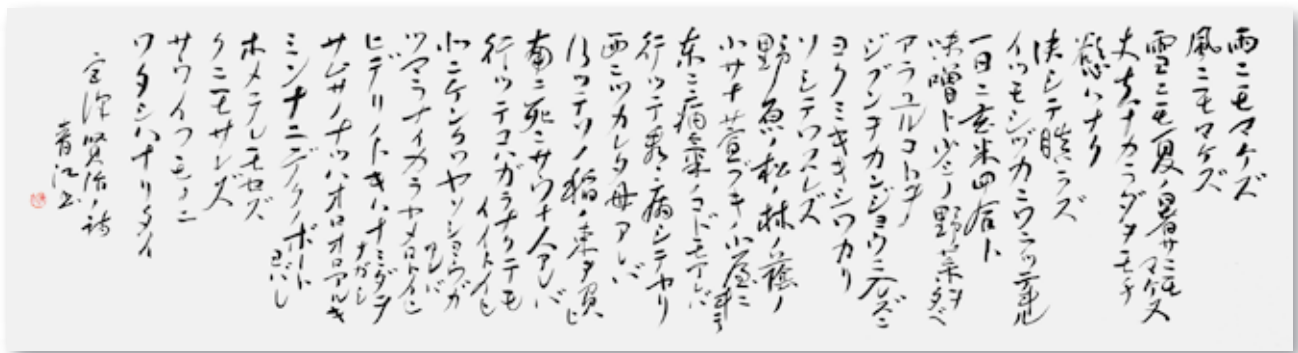
たちねの 母が釣りたる 青蚊帳を
すがしといねつ たるみたれども (長塚節歌)



人生感意気 (魏徵詩「述懐」より)



書道仲間とともに



(宮沢賢治詩「雨ニモマケズ」)



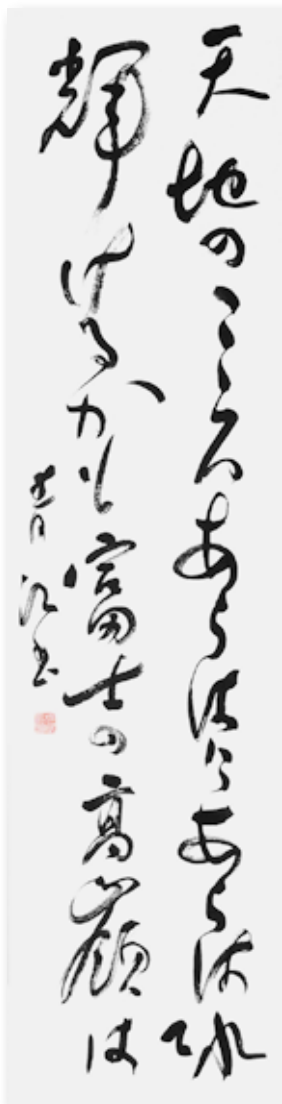
和光同塵

各書体を皆習って

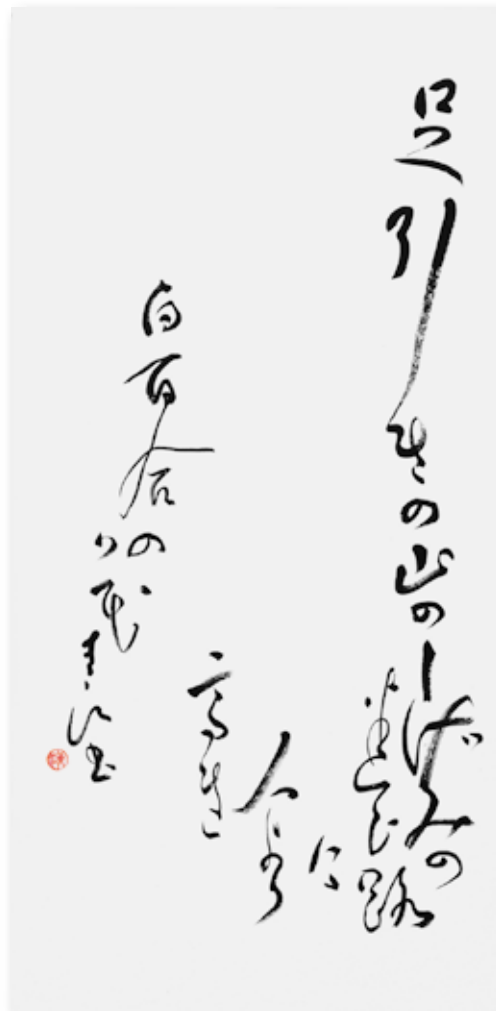
それらがひとつに統一され調和された時

美しい書の世界が現出する。

『書想 — 文化の中の書道 —』より



天地のころあはれは
輝けるかも富士の高嶺は
(若山牧水歌)



足引きの山のしげみの迷ひ路に
人より高き白百合の花
(正岡子規詩)



最上川 逆白波の たつまでに
ふぶくゆふべと なりにけるかも
(斎藤茂吉歌)



春風秋霜